

# タガ 日本の箍の緩みの考察

金沢工業大学客員教授  
（株）人間と科学の研究所 所長 飛岡 健

## 〈はじめに〉 鉄道事故の増加に 何を見るか？

2017年12月16日に京浜東北線の架線接触事故が生じ、数十万人の足に乱れが生じた。この原因は、その前日に行われた架線工事であると報道された。

この事故を含めて、ここ数年鉄道事故が多い。「事が万幸」という諺があるが、この最近の鉄道事故を、日本全体の箍の緩みの一例として見てとれないかという仮説を立ててみた。

何よりも気がかりなのは、2017年12月11日、新幹線始まって以来の出来事が生じた。それは台車に14cmの亀裂が入るといふ事故であった。幸い大事には至らなかったが、新幹線としては、開業以来最大の問題の発生である。全体が17cmだったので、あと3cmの亀裂の進行で完全に破断したのである。仮に破断していたら大惨事になっていた筈である。

何よりもその異常に現場が気づいていながら、中央運行司令の指示は、「問題無し」と判断した点である。

そうした判断を下した運行システム全体をチェックせねばならない事態を招いたのである。これを含めた二連の鉄道事故は、今の日本の何を象徴しているのだろうか？

確かに日本の鉄道技術は、新幹線のみならず、在来線も含めて極めて高いレベルの品質と安全性を誇っていた。しかし、今日地方のローカル線の廃止や、不採算経営を始め、鉄道事業そのものが前の東京オリンピック（昭和39年）の頃のように、輝かしい明日の日本の基盤の建設として役立つ夢多き時代から、ほぼ多くが完成し、後は何となくのサービスの改善や、何となくの安全性の向上の努力等の守り中心の経営や運営にシフトしているのではなからうか？そのシフトこそが箍の緩みを生み出す原因となっていないのではなからうか？

そうした状況では、今日の事業展開は関わる人間の夢を奪うというよりは、夢にならず、かつ若者の人口が減少する中で、鉄道愛好者は増えているのに、鉄道事業の担い手とその希望が薄れ、肝心の鉄道事業そのものに問題が積み重なっていつているようである。

実はこうした傾向は、「桐葉落ちるのを見て、天下の傾くを知る」の傾国の諺の如く、鉄道事業のみでなく、日本の多くの事業分野に広く共通する傾向を示しているのではなからうか？

成長に向けて夢を持って、意欲を持って仕事に向かう状況が次第に薄れ、日本を頽れる方向に持つていつているのである。「攻撃は最大の防禦」であるが、既に日本の多くが守りに入っている。それが原因で日本社会が全体的に箍が緩んで来ていると見るべきではなからうか？

それを本稿において考察してみると共に、対策を早急に施すことが、日本の将来の為に緊要とされる時代状況である事を指摘したいと思う。

何故なら、日本はここらで一端箍を締め直さないと、日本という国はズルズルと落ち込んで行ってしまうように見えるからである。やはり、今一度初心に帰って、日本という国の建国の理念をしっかりと捉え直し、未来の地球社会を捉え、そこにおける「日本の明日の姿、形」を定め、日本丸の行き先（到着港）を示し、そこまでの航海計画をキチンと作り直

2017年(平成29年)		
月日	事故	原因
1月22日	紀州鉄道脱線事故	カーブ曲がり切れず
1月24日	伯備線豪渓駅構内脱線事故	消化活動後、車輪止めを外し忘れて脱線
1月28日	JR大湊線 陥没	野辺地付近の線路陥没
2月11日	広島山陽線作業員接触事故	修繕作業の時に、線路に近づき過ぎた為
2月22日	熊本藤崎線脱線事故	枕木が水につかり、釘が緩み、軌道の幅が広がってしまった為
2月23日	室蘭本線貨物列車脱線事故	異音に気づき、点検したところ、脱輪
5月22日	わたらせ渓谷点検車両車の脱線事故	点検車両車の脱線
6月21日	東海道新幹線架線断線事故	京都-新神戸間で停電。高槻市内での架線の切断
7月7日	東急渋谷駅付近 発煙	トンネル内信号関係ケーブルから発煙
7月26日	琵琶湖線架線脱線事故	架線が火花、小爆発。物による接触
8月8日	JR東海浜松工場内脱線事故	車庫から出ようとして脱線
9月5日	藤液変電所トラブル	変電所の前日の作業ミスから
9月12日	東京モノレール立ち往生トラブル	送電トラブルの為
10月2日	大船駅近くの変電所トラブル	変電所のトラブルにより、通勤ラッシュに影響
10月19日	東急田園都市線三軒茶屋駅	構内の電気系統のトラブル
10月24日	JR宇都宮線	架線送電トラブル
11月15日	東急田園都市線停電トラブル 駒沢駅	送電ケースの絶縁体が溶け、架台に通電してショート
12月11日	東海道山陽新幹線台車破損	のぞみ号の台車に、亀裂
12月15日	東海道新幹線 名古屋駅	ドアの開け忘れ 乗客200人、車掌2人乗れず
12月16日	京浜東北線 架線接触事故	未明の架線工事の際の調整が俯瞰職の為、ショート
12月24日	東北新幹線 架線切れ	レール点検中に、架線切れを発見
12月27日	JR九州 豪華寝台列車「なつ星 in 九州」	エンジン不具合で、山登れず
12月27日	JR播内線 駅通過	運転手が一時的に考え事をして、駅を通過、95m行き過ぎ停止

図1 鉄道事故(2017年) ※抜粋

す必要があるのではなからうか？

その為には、何よりも現状認識を未来との関係で把握する事が肝心であるし、もう少し主体的な国家運営を世界の中で行っていく事が望まれる。そう考えるのであるが、実は日本にはそれを進めていく上で、大きな阻害要因がある。その一つは、相対的国力の低下である。最大期17%の世界においての、GDP比率も、今や5〜6%に過ぎない。しかも確

実に今のままでは落ちて行く。

何よりも日本においては、世界との関係においては、国力を相対的に落としているのだが、絶対的には僅かであるが1%前後の経済成長を遂げているので、失墜感を殆ど国民は抱いていない。それ故に、国民の大半は現状に満足していないものの爆発する程の不満を抱えている訳ではないのだ。実はそこが、「微温湯の中の蛙」の如き問題であり、日本

のアクレス腱になりかねないのではなからうか？

加えて、もう一つの日本社会の弱点は、日本人が主体的努力による問題の解決でなく、他者に本質的に依存して事態を解決しようとする精神構造を宿している事である。それは「長いモノには巻かれる！」の他者依存の解決策を常に求める精神であり、長いモノに対し一種の諦観を抱いている事である。一カ所に定着定住

型の水田稲作生活の中で身に付いてしまった「お天道様次第」の感覚である。今日の日本の安全保障にしても、世界の警察の座を降りようとしている米国と、常任理事国のイデオロギーや、現実の体制や制度の違いから生じる対立から安全保障理事会で、全員一致の決議の図れない国連頼みの状況なのである。

これからの指数関数的変化の時代には、自らの意志と力で未来の難局を主体的に切り拓いていく覚悟を持たないと、日本国は世界史の中で、相対的に沈んでいく事になるであろう。かつ将来的には、ヘーゲルの言葉の「量的拡大(増大)は、質的転換を来す」の言葉の如く、いずれ相対的地盤沈下の質的転換を悪い方にききたし、絶対的にも沈んでいく事になるのである。まさに、日本社会の根本から捉え直して改革せねばならない時がきているのである。

(1) 日本全体各分野での「**緩み**」をどう見るのか？

日本社会の「**緩み**」の考察というタイトルの本稿を展開する訳であるが、それをどのような評価基準や評価方

法、あるいは方法論を採用して行うかを、まず述べておこう。何故なら、それらがしっかりとっていないと、導かれる策もすっかりとしたものにならないからである。

本稿においては、**箍カガの緩みの現象**面について触れるしか誌面の制約で出来ないが、行動にどう繋げるかの流れを把握しておく事が更なる解決策の追求の為に重要である。

まず一人の人間を取って考えてみると、人間の活動のメカニズムには次のように捉えることが出来る。まず、「考え方」であり、次いでその行動、そしてその行動に伴ってどのような「現象」が生じているか。その流れで観察する方法である。

ここでは一人ひとりの人間のメカニズムの把握の方法を用いて、社会全体のメカニズムの把握をアナロジカルに行う事にする。

人間の行動は自動車の運転と同じく、「認知」↓「判断」↓「操作」の流れで行われる。

そしてその人間を観察するには、人間自体が三重の重層的階層構造体として「生理」の上に、「心理」、「精神」を形成している生命体である。

るとの認識が重要である(図2)。

その生理的階層の主たる機能は、自律神経系による人体各部のコントロールであり、その主たるものは、新陳代謝(メタボリズム)であり、人体の恒常性を司るホメオスタシス機能である。

何よりもメタボリズムにしても、ホメオスタシスにしても、スタティックではなく、ダイナミックにスタビリティを保つべく機能をしている。

こうした一人ひとりの人間の思考や行動のメカニズムを、日本社会のこれらの観察、思考にアナロジカルに適用する事が出来るであろう。これはスパンサーの「社会有機体論」と似ており、擬生物主義の批判をまねかねないが、その批判を十分に承知の上でここでは議論を行う。日本社会を生理―心理―精神との三層に分けて捉える事も、より議論を体系的に深化させる上で有効である。

そして日本社会で生じている現象(結果)を、それを生ぜしめている行動(外的原因)と、更にその行動を生ぜしめる考え方(内的原因)との図式から分析する方法も一つの分析方法である。

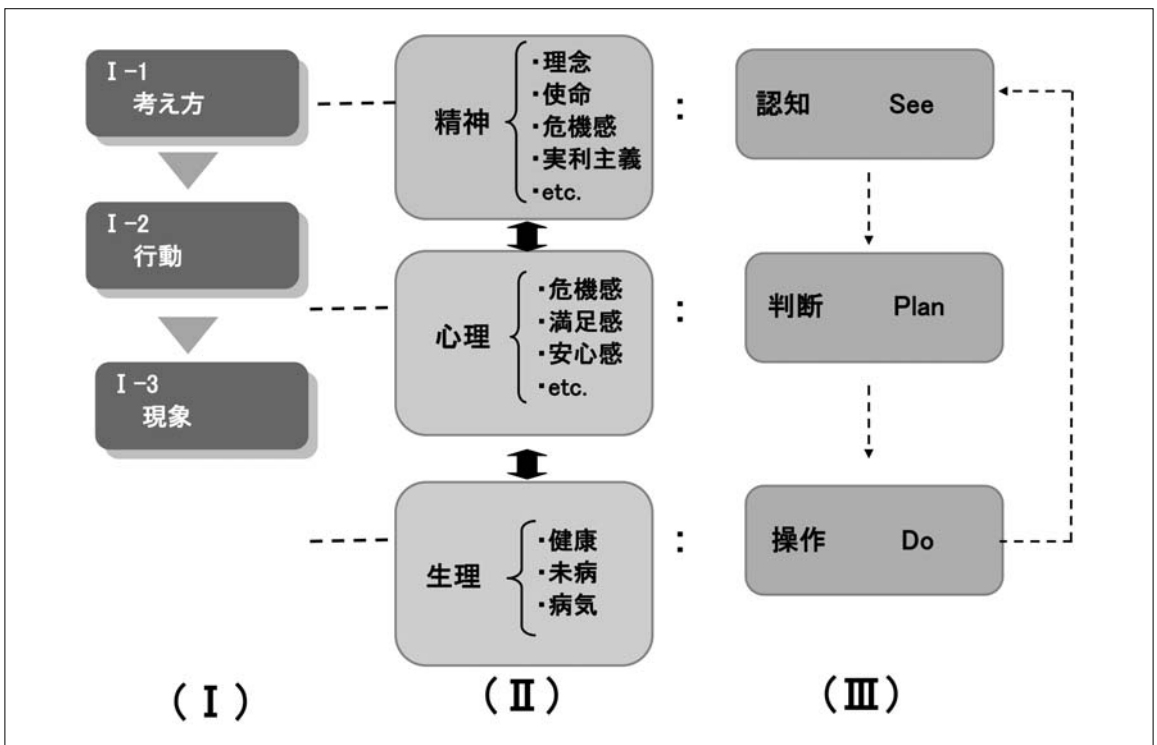


図2 人間の行動-認知のメカニズム

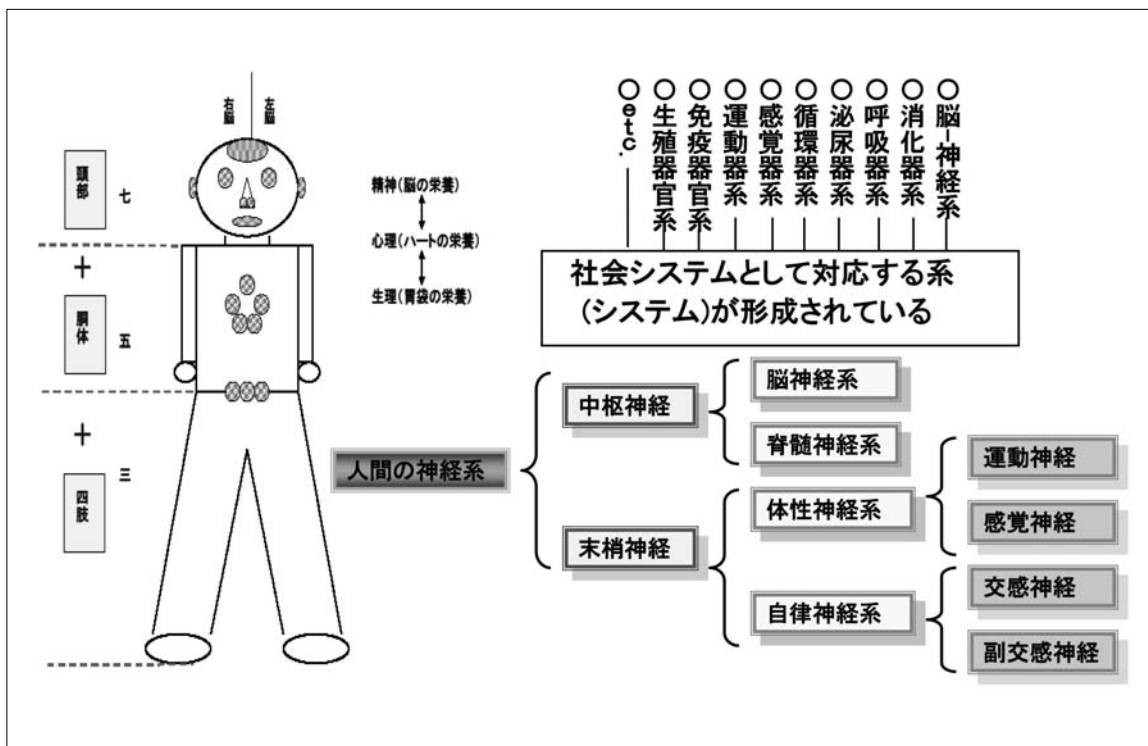


図3 人体の基本構造 (これを社会に適用)

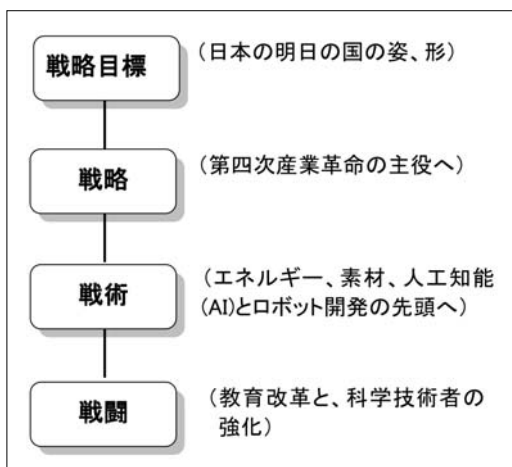


図4 戦略目標 戦略 戦術 戦闘

この為にも、これからしばらくの間、何よりも大きな歴史の流れと世界地図を眺めながら、地

論理の全体構造やフレームが見えなかつたり、行つたり、来たりを原因と結果でしていたり、鶏が先か卵が先かの議論になったり、行く先が定まらないのに、航海計画を今の瞬間に立てているというケースが多く見られるのである。それ故、思考の方法論をしっかりと定めておく事が重要である。

こうした議論を展開するに当たり、何よりも必要とされるのは、戦略目標(〇×日本の明日の姿、形)であり、それに対しての戦略であり、戦術であり、個々の現場としての戦闘なのである。「日本の明日の姿、形」という戦略目標(日本丸の航海の到着する港)が決まらずして、戦略―戦術―戦闘が定まる訳でなく、仮にそれ無くして行くと、あてはずぼう日和見主義になったり、弥縫策になったり、議論の為の議論になってしまう。

今日の日本の縮が緩んでいると表現する時に、この生理―心理―精神の分類の下に各々の縮の緩みを分析していく事が、より鮮明に問題を明らかにしてくれる。

そして認知―判断―操作は、これからの縮を締め直すに当たり、まずどのように縮が緩んでいるかを認知し、それを未来の日本の姿と照らし合わせて判断し、その判断に基づきどのように操作するかを考えていく。

実はこの認知―判断―操作を實行するに当たり、今日の様々な考えや、意見や議論があるが、こうした

論理の全体構造やフレームが見えなかつたり、行つたり、来たりを原因と結果でしていたり、鶏が先か卵が先かの議論になったり、行く先が定まらないのに、航海計画を今の瞬間に立てているというケースが多く見られるのである。それ故、思考の方法論をしっかりと定めておく事が重要である。

こうした議論を展開するに当たり、何よりも必要とされるのは、戦略目標(〇×日本の明日の姿、形)であり、それに対しての戦略であり、戦術であり、個々の現場としての戦闘なのである。「日本の明日の姿、形」という戦略目標(日本丸の航海の到着する港)が決まらずして、戦略―戦術―戦闘が定まる訳でなく、仮にそれ無くして行くと、あてはずぼう日和見主義になったり、弥縫策になったり、議論の為の議論になってしまう。

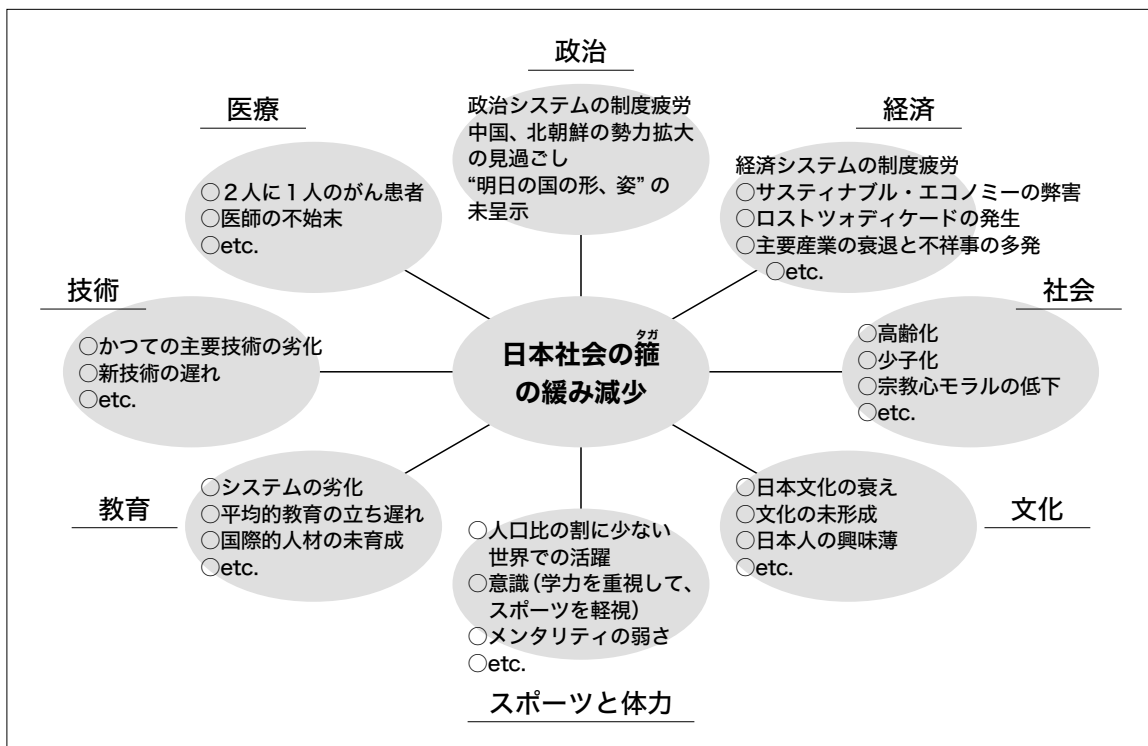


図5 日本社会のタガの緩み現象

地球上の真の平和を考えながら、個別日本の役割を地球儀の上で将来的に見つける事である。

今日のように変化の激しい時ほど、物事を考える際には大局観と、見えないモノを見る、<sup>タガ</sup>「理性の力」が必要なのである。

こうした一人の人間の考察、観察の方法論を、<sup>タガ</sup>「籠の緩み」を日本社会として論ずるに当たって、採用する事にする。まず本稿においては日本の各分野でどのような<sup>タガ</sup>「籠が緩んでいるのか」について見てみよう。

## (2) 政治の<sup>タガ</sup>籠の緩み

一言で語れば、政治システムそのものに制度疲労が生じているのが今日である。

政治の役割は、国民に国の存在意義を知らしめ、その国が何処に向かつて行くかの目標を示し、それに対する戦略、戦術、戦闘を示し、国民に実行してもらう事であるが、今日の日本の政治は、行く先を示せず、太平洋只中に漂う船の如くであり、全く目的を持って十分に計画された航海計画に沿って操縦されていないのである。

何よりも、中国、北朝鮮の軍事的恐怖の拡大を、世界の力を頼りに、自らでは何ら有効な対策を示さないで、いや正確には若干の努力はしているが、全く対応力にはなり得ていないので、今日の中国の軍用機の防空識別圏（東シナ海の大

半）までの飛来や、北朝鮮のミサイルの日本上空通過を許している。しかも、漁業や鉱物資源や島の主権のように、多くの日本の海の権益を他国が侵犯しているにも関わらず、何ら有効な策を自力では打っていない。昔なら宣戦布告であったが、更には米国のTPPの離脱、パリ協定からの脱退、ユネスコからの脱退を黙認し、核廃絶に対しての世界の動きも醸成せず、アメリカの属国としての立場を改める努力は殆んど無いのが実情である。実質出来ないのである。

更には、何よりもグローバル化する地球上で、日本はその世界的役割に無関心である。中国等が「Belt & Road (二帯一路) initiative」をデザインし、世界に向けての貢献の意志と戦略を声明し、その裏付けとしてのA I I Bを半分の資金負担をして、

世界の関心を集めると共に、国民に夢を与えているのに対し、日本は、「日本の明日の姿、形」を示し得ない事と共に、国際化された社会に対し、世界第三位のGDP大国であるにも拘わらず、部分的資金の拠出はあるものの、世界の人々に夢を与えるような貢献策を呈示していないのである。結果として世界から見るとその存在は影が薄くなってきている。

かつては、「ルックイースト政策」の如く、アジアの国々は日本を一つの発展のお手本としていたが、今日では少々過激ではあると思うが、「もう日本から学ぶ事は無い」と語る国も登場する状況にある。

そして、この国の意思決定のメカニズムに、真の民主主義の機能が働かなくなっている。本来現在の間接代理制の民主主義的政治システムにおいては、二大政党の存在があり、その間での政権交代のある事が望ましいが、その政権交代がスムーズにいかないどころか、野党そのものが自滅の形で弱体化し、対抗勢力を形成し得ていない。この原因には第二次世界大戦敗戦の余波を含め、多くの原因があり、一概に論じる訳にはいかない

が、今後の日本の国家運営において重要な課題である。

更に今日の日本においては、国民の意識が、何が今日の日本の存在を造り出し支えているかを忘れ、自己中心の個人、家庭、地域、企業、公的機関が増え、全体の目的よりも自己中心のみに活動するケースが増えてしまっている。これにより全体としての纏まりが極めて悪くなっている。結果として全体としての合理的な意思決定が的確になされず、国家運営にとって都合の悪い状態が生まれている。もつと日本の将来の為、そして世界の為に日本人が真剣に働かねばならないのに、己の現在の幸せの為にのみ働いているのが日本人の今日の姿である。

更に今日の第四次産業革命(脳業革命、SC3革命)の時代において、増々国民間の格差拡大の傾向が強まっており、中間層の解体と貧困層の増加が見られる。これは社会を不安にする大きな政治的要因となるので、何らかの政策が税制以外にも取られるべきであろう。何よりも負担と分配の平等のみでなく、稼げずチャンスの平等さ、公正さを本質的に考

えるべき時に来ているのである。第四次産業革命は、脳業革命であり、頭の使い方(脳業)によって、手足の労働とは桁違いの労働生産性が生じる事が社会のインフラとして働く時代であるからである。その事を指摘する人は少ない。

そして、国民の力を未来に注がせる為にも、厳しい状況を能動的に先回りして、頭を働かせる事が重要である。例えば、「人口減少に関しても高齢化にしても、世界に先駆けて日本が挑戦しているのだ!」と考える方が良く、AIやロボットは仕事を奪うのではなく、新しい仕事を生み出すし、人間をより本質的な人間の仕事につかせるのだと考える事である。事実今日ハイテクを活発に用いている国ほど失業率が低いのである。

### (3) 経済的<sup>タガ</sup>縮の緩み

#### ① 全体的に問題点の増加

日本経済は今日実に微妙なところ<sup>①</sup>に位置している。図6に示したように日本企業は多くの問題点を抱えているが、今日のみを見てみると、その経済は一見する限り、必ずしも悪くない。2017年の業績は日本単

体で見ると、決算も好業績企業が多く、企業の内部留保も積み重ねられ、400兆弱近くまで達し、個人金融資産も海外経済の好調に支えられた1800兆円を超え、日本銀行の保有資産も300兆円台にある。

これらの原因は、円安、株高と輸出企業の好調と、年間3000万人に近づきつつあるインバウンドの観光事業の増加によるところが大きい。日本企業の新しい時代への対応の結果では無く、むしろ在来資源の海外要因での広がりが大きいだけである。

しかし、全体としての成長は1%前後であり、日本自体としては僅かであるが絶対的に成長しているもの、世界全体から見ると、日本経済は成長率が低く、3分の1〜4分の1程度である。と同時に、人口減少による市場の縮小、働き手の大幅減、更には高齢化による様々な弊害が発生し始めている。まだ日本経済は、糖尿病になり、手術が受けられないという状況ではないと判断するが、更年期障害を迎え、経済構造そのものが古くなり始め、制度疲労を生じており、いずれ糖尿病になり、手術

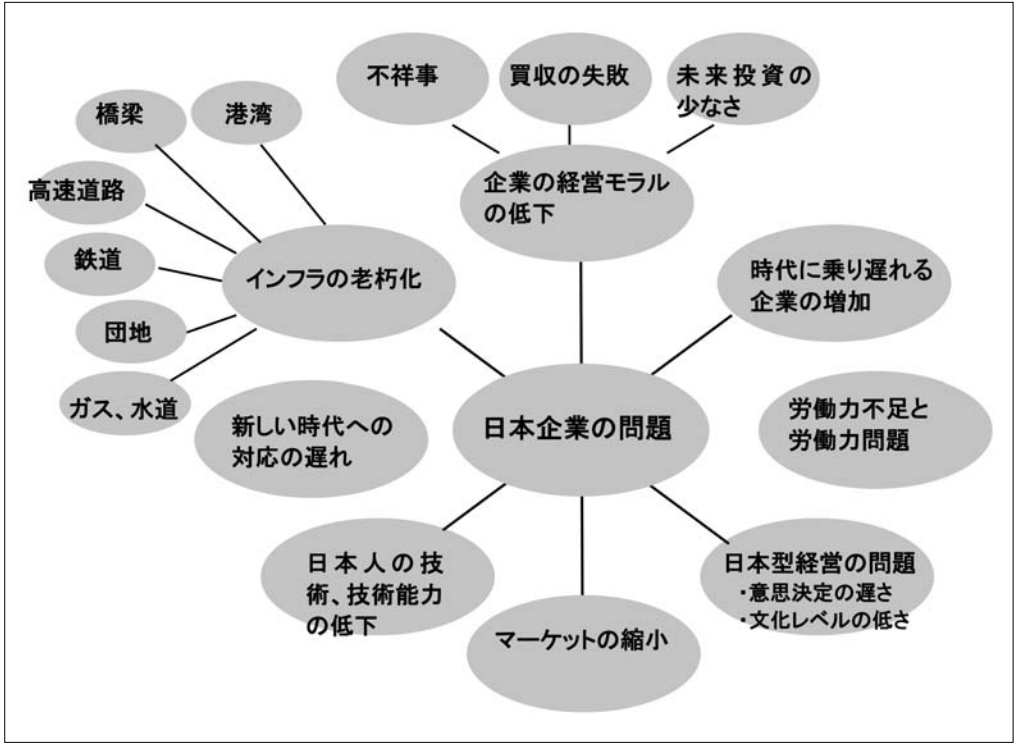


図6 日本企業の問題

不能となる可能性が高い。  
 技術的には、今までプロセス・エンジニアリングから一番手頃としての  
 プロダクト・エンジニアリングへの転換が望まれているが、かなり手こずっているのが実情であるし、その技術

に關しても後発国の追い上げが激しく、それに対応してより速く進む状況になつていないのが今日である。また先進国からも逃げられている状況も見られる。

また日本の戦後のインフラ整備に入つてから、既に数十年の歳月が経ち、既に老朽化して事故発生率を高める状況にあるインフラが、港湾、鉄道、高速道路、橋梁、水道管、ガスパ管等に増している。戦後に農村部から大都市周辺の工場地帯に流入した地方からの労働者の移住に対して主として提供された公共団地も老朽化すると共に、住む人間も高齢化し、その運営に翳りが出ている。しかも大幅に空室率が上昇し始め、社会問題化している。

端的に言えば、過去の財産の上に今日の日本経済は何とかサステイナブルな状態で歩んでいるのみで、新しい時代への適応が余り上手く運んでいないと言えるであろう。

②サステイナブル・エコノミーの誤謬

第二次世界大戦の敗戦（1945年）から、朝鮮動乱（1950～53年）を契機として奇跡の復興を

遂げた日本は、1968年にドイツを抜いて世界第二位のGDP大国になった。そして、1986～90年のバブルを経て、1991年4月からのロスデケード（失われた10年）に投入し、その後さらに10年以上迷走した。その間に、日本社会には、何となく現状の停滞を容認する形で、「もう十分に成長したのであるから、現状を維持出来れば良い」と一部の学者の主張する「サステイナブル・エコノミー論」が何となく支配的になつていたし、国民もそれに納得していたようであった。

しかし、2010年に中国にGDPに追い付かれ、それから7年間で中国のGDPは1000兆円を超え、日本の2倍強になり、なおかつ今日でも6～7%の成長を続け、年間60～70兆円の新市場を形成し続けている。ところが日本は良くとも1%前後であり、マイナスも含め、GDPの伸びは停滞している。明らかに世界全体は3～4%で成長しているのに比べ、日本のGDPの世界比率は低下していくのみである。

考えねばならぬのは世界人口が70億を超え、指数関数的変化の経

済社会において、守りに入った国は、

相対的においていかれるのみなのである。日本の将来を考えるならば、世界の成長と歩調を合わせねば、相対的に増々地盤沈下していく事になる。今一度、サステイナブル・エコノミーではなく、日本は、ゼーマージン・グカントリーとしてエコノミックグロースを再度はかるべきであろう。今一度、明治の富国強兵対策を考えるのも一考であろう。但し、今まで以上に慎重に地球環境への負担を考えていく事が不可欠である事は論を持たない。

### ③日本の主要企業の不祥事と世界からの後退

最近の日本企業の経営モラルの衰退は少し目立ち過ぎのようである。神戸製鋼のような日本のインフラ企業の一つが、検査を不法に行つて出荷していたり、三菱自動車、日産、マツダもその検査を資格の無い人間にやらせたりという不祥事が続発し、世界における日本企業の信頼性評価に影を落としている。更に、三菱マテリアルにしても、東レにしても、データの改ざんや日本のイメージを低下せしめる大問題を引き起こしているの

である。

これに対しても、古くとも法は法であるので守る事が第一義である。しかし、日本の箍が緩んでいるのは、その法そのものが古くなっていて、時代に適応しなくなっているのに、そのまま放置してある事が同時に問題なのである。

実のところ、検査を資格を持っていない人が行つても、検査そのものがAI等を導入し、機械化され、自動化されれば資格そのものは余り問題ではないのである。それは、これからの時代、特に古い制度そのものを放置しておいて、その下での対応を要求するという矛盾をもたらし、結果として問題を生ぜしめることになるが、その事自体が問題なのである。

あるいは液晶においては第一人者として誇っていたシャープが、台湾のホンハイに買収されたり、東芝が原子力に関しての企業買収の失敗から債務を持たされて、結果的に事業の儲け頭の半導体事業の売却、あるいは商工中金の不正融資や、民営化もこれらの流れである。株式市場からの退場の危機が迫り、あたふたしている姿も今日の焦眉の課題である。

更に日本企業が、世界の主要売上

高の企業統計から、次第にその立場を落とすと共に、消えて行っている光景も今日著しいものとなっている。いずれにしても、日本経済は、企業の形態にしても、金融制度にしても、経済関連の方にしても、制度的疲労をきたしており、それがタガを緩める一因になっているものも事実である。

### (4) 社会的箍の緩み

#### ①人口減少と少子高齢化と社会インフラの維持の困難化

既に日本社会は、人口減少期に入り、毎年数十万レベルの人口が減る時代に入り、今から30〜40年後には3000万〜4000万人の人口が減り、約8000万人位の人口社会になるものと人口統計学的に推測されている。そうした人口減そのものが社会全体の緊張感を高め、国民と必死の対応に向かえさせれば良いが、逆に微温湯的に緩める状況にあると同時に、厳しい現実を生み出している。

その第一は、既に26%を超えた高齢化比率であり、4人に1人以上が

高齢化であり、かつ日本の個人資産の3分の2を所有する事が、老人をのんびりさせ、若者に負担の重い労働を求め社会構造を生み出している。何よりも今日の日本の繁栄の礎は戦前生まれで、戦前に教育を受けた人々が1945年の敗戦後の新たな国造りの為に、太陽が出る前から働き始め、日が沈んでも働く事によって築かれたものである。

しかし今日次第に労働力が減少していき、将来の日本の経済基盤そのものが縮んでいく事が明らかに目に見えているのに、労働時間の減少と、その働き方の規制ばかりに目が奪われ、それを本質的でない労働総体の減少の方向で修正しようとしている。明らかに今日の政策は、今生きている人の為のみのものであり、明日の子孫達の為の基盤造りをするという意志は全くと言って見られない。ましてや世界の貧困に立ち向かう意志など全く無いのである。まさに社会存続の為の箍が緩み出し、今日の繁栄が明日の頽れをもたらす事が懸念される。このままでは、社会インフラそのものが成立しない状況が日本の到る所で生じていく事に



なる。

## ②倫理観の喪失

今日の社会はいたる所で、人と人との間(倫)の理としての論理感が失われた行動が目につく。

こうした倫理観の喪失が、今のところ経済的に若干でも成長を遂げているので、何とかほころびを見せないである範囲で治まっているが、仮に経済的に厳しくなった時、こうした倫理観の乱れが一段と社会を不安な状況に振れていくようになることが予想されるので要注意である。

システムが全体として上手くいっている時には、問題点は見えないが、その問題点がシステムを劣化させ、どこかでシステムを根本から壊してしまいかねないのである。

## (5)日本文化の箍タガの緩み

### ↓下手をすると日本文化の

### 基層をも失うかも?!

今日の日本の文化の全体像を見ると、日本人自体が永年かけて築いてきた日本文化の基層を破壊しているように見えるのである。文化の表層が一時的に日本の歴史から姿を消す事は何とか認められても、その

基層が崩壊してしまうと、日本文化は世界史の中に呑み込まれ、国体そのものを危うくし、その姿を消してしまう事になる。それは絶対に避けねばならない。

そもそもここで日本文化の基層とか、表層とかの言葉を用いているが、おそらくこれらの言葉そのものへの関心も薄いのが今日の日本人であろう。基層が失われるということは日本人の存在基盤が、矮小化されてしまふ事になり兼ねない事を意味している。

それがどれ程国家にとって大きな出来事かを理解する人は少ない。ここでは詳しく日本文化論を展開していく余裕はないが、究めて簡略化して述べれば、哲学のベースとなる三つの基本概念の日本人としての捉え方の劣化である。

こうした認識のベースは、日本列島という豊饒、かつ厳しい淘汰圧を有する地理、地形や、気象条件を自然に持つ蓬萊島で、日本人が永年環境適応して存続を画する中で、日本人の脳裡に形成された世界の中でも優れた精神活動の基盤なのである。

ところが今日では、全ての存在を

有り難いと思う意識は薄れ、余り他を尊ばず、自己中心となり、あたかも過去も未来も考えないで今を享受する人々が増えている。明らかに日本人の精神文化の基層の崩壊であり、日本人が根無し草になっていく前兆である。いや、既に今日かなり「根無し草」になってしまっている。

こうした日本人の日本文化の基層の崩壊が日本に何をもたらしているかを少し現象面から捉えてみよう。

### ①日本文化の海外流出

日本古来の武道としての柔道も空手も、今日フランスやロシアあるいは南米等で盛んになり、日本人の手から離れて世界的に運営される状況が生まれている。

あるいは、日本の盆栽にしても、フランスやイタリアで流行していくのみでなく、彼らの生活の中に深く浸透し、自らの生活文化の中に取り込まれていつている。ところが、日本にも愛好家は居るものの、かつてのように何気なく生活文化の中で愛でているという習慣が薄れ、次第にその深味を失いつつある。庶民の生活文化の質が次第に低下しているの

である。

あるいは最近では東南アジアで、日本のお茶が特に抹茶が流行しており、そこでは物質としてのお茶を飲む行為の中にある作法や、その精神を理解しようとする人々が増えていく。ところが肝心の日本人はどうであろうか?お茶よりも、コーヒーや紅茶を始めとする外国産のお茶の方に向かい過ぎていないだろうか?

また日本人が開発した「旨味」という感覚とその調理法や、旨味素材に関してもフランス料理やイタリア料理に取り込まれ始めているし、高い評価を受けている。確かに日本人の多くも、この日本料理に関しての興行きを求める努力をしているが、かなりの部分が日本的食文化から遠ざかり、食文化の破壊者となっているのが実情であり、日本的良さが海外へ移っていく可能性を高めている。それは最近の相撲界の出来事もそれを示唆しているようだ。相撲界も柔道の如く、グローバル化に向かっていくのであり、その方向で相撲の明日を考えていかねばならない筈なのである。しかし、現況は全く違う対応しかしていないのである。

## ②「見えない所にも人間の視線を」の衰退

日本文化の奥行きの一つは、「目に見えない所にも目配りを」という特色があった。しかし今日の人は、「四角い部屋を丸く掃く」という言葉が登場するように、一つひとつの物を事を大切に扱うという心を少し何処かに置き忘れてしまっているようである。物を大切にしないし、「袖振り合うも他生の縁」の如く、僅かの出会いも大切にしたいものであるが、余りにも人間の数が増え、毎日知らない人の間に居る時間が長くなることによつて、人との触れ合いを著しく寂しいものに変質せしめてしまった。

物造りにおいても、人の目に触れない裏側にも、内部にも職人の気配りが行き渡っていたり、また服の裏地に凝ったり、塗り物の内側等様々な道具や機械にしてもそうであるように、それは日本人の持つ特質の一つであった。しかし今日人目に触れないところから手を抜くケースが出て来て、検査を手抜きしたり、掃除や衛生面等をしつかり行うという心持が薄れている。

昔の日本の木造建築は出来る限

り釘を用いないで、組み合わせの妙で構造化していき、素材を考えて、自然の接着剤で接合を行っていたが、今では釘や螺子によつて接合し、強力な化学接着剤を用いてしまうので、一端出来上がったものはそれを解体する時には殆んど廃材になってしまふ。各々の素材を活かし、より長く傷つけないまま保存するという努力の心が薄れてしまっている。

今日ヨーロッパのデザインの二つのキースローガンは、

1. 目に見えない所にデザインの光を

2. 使用目的が終わつたら、壊し易さを

である。これは元々日本文化に合ったものであるが、日本で薄れ、海の彼方で浮かび上つてきているのである。

### ③日本の宗教の箍の緩み

日本人は、「悉皆仏」の教えのように、全ての存在している仏性を見て、尊び、敬い、慕う愛情を持つて接してきた。しかし今日の日本人は程々に満たされている事によつて、一般の人もさることながら、宗教に関わる人達も、どうも何か箍が緩んでいるのではないかと思えるのである。

日本人の宗教心の衰えが、神仏を始めとする宗教団体の運営を困難にしている事もあるが、宗教関係者自身の心の中にも、真の宗教心の衰えが在り、一つの職業と化し、本来の有り難さを失つてしまっているのではないだろうか？ 庶民と違う生活をし、厳しい自己鍛錬をし、仏教百万巻の書の英知を学んでいるからこそ有り難い存在であり、宗教者を尊ぶ心も庶民に生まれるのであるが宗教者が庶民のレベルに降りてきているのが今日の実情であろう。

京都へ行つて夜の世界において結構目立つのが宗教界の人々であるし、地方においても神社仏閣の副業が活発になると同時に、世俗化が著しく進んでいるようだ。

本来これからの日本は、世界に誇れる高い精神性を持った宗教家と宗教人、あるいは人々の宗教心が、世界において日本社会の精神性の高いレベルでの存在の武器とする事が出来たが、どうも尊い武器も錆びつかせてしまい、徐々に使い物にならなくなっているのではなからうか？ ここでこの認知判断をベースに次にどのよう

も、具体的に考えねばならない。その為には、前述の如く、日本社会の生理―心理―精神の重層構造として捉え、その根底をしつかりと把握し、戦略目標を描き出し、そこから根本的な対応策を戦略―戦術―戦闘として導かねばならないのではなからうか。もち論、今日の宗教界にも、その事に気付き改革の努力をしているし、自らも深く研鑽を積み、徳を高めている方々もおられるのは承知している。

しかし、本来の宗教の存在意義を理解し、自らが大衆済生の苦悩を嗅ぎ取り、自らが悩み昇華させる事によつて、大衆を救済するという真の目的を忘れ、形式的な行事の遂行者になつてしまつている方々が若干目立つのではないだろうか？

### 〈おわりに〉

### 再び日本人と日本社会の箍を締め直すぞう！

ここでは日本の社会のタガの緩みの一部を見てきたが、まさに日本人が未来に可能性や夢を失つて来ている事に、その原因があるのである。さて、どうするか？